

五文型について

小川 明

(平成6年9月30日受理)

On Five Sentence Patterns

Akira OGAWA

(Received September 30, 1994)

1. 五文型なるものは、少なくとも日本における英語教育において、文法の中に必ずと言っていいほど出てくる。なぜなのか、日本語を母語とする人にとって特に必要である理由が、何かあるのではないか。日本語になくて英語にあるものを習得させるために学習上便利なものであるからではなからうか。一方英語と日本語の対照研究においてはそれほど五文型については言及されている訳ではない。久野(1973)では語順の比較の問題はかなり論じられているにもかかわらず、特に注目されている訳ではない。生成文法が指摘していることは、例えば日本語の語順が比較的自由であること、語順が鏡像関係をなすこと、主語が脱落できることなどである。五文型の重要性は言語普遍性の視点から見ると見落としてしまうのではないか。しかし日本語対英語という観点からみると五文型は大変重要なことのように思われる。五文型の持つ意義を問い直したのは宮下(1985:25)である。

日本語では人や物とその動作、動作とその目的物などの関係を助詞と云う語で表わしますが、現代英語では、名詞の格屈折が消滅したので、これらの格関係の一定の組合せを云わば透明な文の枠として文法化しています。この枠は、これまでは語順とか文型と称されて来ましたが、語順自体が格関係を表わすのではなくて、透明な文の枠の所定の席に名詞や動詞などが置かれた結果、見掛けの上では語順が格関係を表わすかのように見えるだけです。語順は格関係を表わす透明な文の枠を媒介するだけです。この透明な文の枠は、同様の文法を持つフランス語など母国語とする人には、極く自然に理解でき身に付け易いのですが、個々の助

詞と云う語で表わす日本語を母国語とする私達日本人には、分かりにくく身に付けにくいのです。

2. 本稿では五文型について若干の問題を論じてみることにする。五文型の源は Onions であると言われている。一体五文型とはどういうものなのか、整理してみよう。
- i. 動詞によって文型が決まる。
 - ii. 文型の種類は5つである。
 - iii. 動詞には必ず伴わなければならない要素があり、その数は決まっている。動詞の前には必ず一つ、後に最大二つ生じる。
 - iv. 要素の占める位置によって文法関係が決まる。
 - a. 動詞の前か後によって、主語か目的語 or 補語。
 - b. 動詞の後に一つ要素が生じる時、目的語か補語。
 - c. 動詞の後に二つ要素が生じる時、間接目的語+直接目的語か目的語+補語。
 - v. 要素の統語範疇は文法関係によって決まる。主語か目的語であれば名詞句、補語であれば名詞句か形容詞句になる。

これが基本であって、実際の英語の文に当たってみると五文型ですべて片付くわけではない。そこで拡張、修正の提案がさまざまなされているのである。しかしながら英語の持つ基本的な性質は見事に捉えられている。つまり動詞が決まると枠が決まりかならず要素で埋めなければならないこと、順序によって文法関係が決まることなどが捉えられているのである。

具体的に考えるために、日本語と比較してみよう。例えば、「盗む」と「奪う」という動詞は、小泉保他編(1989)によると以下のように記述されている。

「奪う」 文型 「人・組織」{か/は} 「人・組織」

から「人・物・事」を奪う

「盗む」 文型 「人・集団・生き物・組織」{が／は}

「人・組織・所」から「人・物・事」を盗む

日本語で動詞を選択すると決まってしまうことは、助詞である。枠は埋めなくてよい。「奪う」について言えば「人・組織」{が／は}は必ずしも表現される必要はない。その他の要素も同様である。また順序も絶対的なものではない。「人・組織」{が／は}と「人・組織」からと「人・物・事」をの順序は変わり得る。これは文法関係が語順ではなくて助詞によって示されるからである。このために枠・順序に依存する文型という概念が生じなかったと思われる。それに対して英語では動詞によって枠が決まり必ず埋めなければならない。順序は決まっている。「奪う」と「盗む」に対応する rob と steal という動詞を使えるようになるために最低何を知っている必要があるかという問いを立ててみよう。

- (1) a. He robbed me of every penny I had.
b. Someone robbed the school.
i. 主語の位置に「取る主体」が来る。
ii. 動詞のすぐ後の目的語の位置に「被害を受ける対象」が来る。
iii. 前置詞 of の後に「取られる物」が来る。
iv. 主語、目的語は文の必須要素であるが、of 句はなくてもよい。
- (2) a. A thief stole the money from the safe.
b. Somebody has stolen my watch.
i. 主語の位置に「取る主体」が来る。
ii. 動詞のすぐ後の目的語の位置に「取られる物」が来る。
iii. 前置詞 from の後に「取られる物の出所」が来る。

主語、目的語は文の必須要素であるが、from 句はなくてもよい。また出所は from 自体の意味から明らかなので steal が from 句を取ることは steal に関する知識としては覚える必要はないかも知れない。

特に私達には rob の目的語の位置にくるものについて誤りやすい。このことは steal の使い方のやさしさと比較できる。これは日本語では「奪う」と「盗む」のどちらもいわば「目的語」に「取られる物」がくるからである。rob と steal の目的語の位置に生じる要素の意味的な違いまでは五文型では処理できないであろう。

このように、英語と異なり日本語においては必ず埋め

なければならない枠が存在しないのである。文脈からわかることは動詞によって決まる要素といえども、自由に省略できる。むしろ省略しないと煩瑣な感じがすることが多い。そういう意味では文脈依存型の言語である。

3. この基本的な日本語の性質が短歌・俳句という文学形式を支えていると言える。動詞が決まると必須の要素があって省略できないとなると、省略を土台とする文学形式が生まれることはできないであろう。英語の詩をちょっと見るだけで、詩といえどもいかに省略ということが簡単にできないかがわかるであろう。動詞があればその主語、目的語、補語などは省略不可である。

ただし英語において省略が行われないということではない。次の例をみてみよう。

- (3) a. She can't sing tonight, so she won't (sing tonight).
b. If he works hard, I won't have to (work hard).
c. He always wakes up earlier than I (wake up).

()内の要素は省略可能である。このように、省略は英語においても存在するが、常に言語の内部で処理されている。概略、言語内で復元可能な要素のみが省略できる。

さて、英語の詩のリズムは音節に土台を置く。強音節と弱音節をどのように配置するかによってリズムを作り出す。それに対して短歌・俳句は拍の数(ひらがなの数に等しい)を五とか七と数えることによってリズムを作り出す。このちがいは二つの言語の根本的な音声の性質の違いに原因するのである。すなわち日本語においては一つの拍を発音するのに要する時間はほぼ等しい。「あめふり」を発音するのに要する時間は「あめ」を発音するのに要する時間のほぼ2倍である。一方英語の発音において一定に繰り返されることは強音節と弱音節が交互に生じることである。

このようにどちらの言語における文学形式もそれぞれの言語の音声の一番土台になっている性質が具現している。これを推し進めていくと、省略可能である文学形式が存在することは、省略可能と言うことが日本語の土台をなす基本的な性質であると逆に考えることができる。つまり英語においては、動詞によって埋めなければならない枠が決まってしまうのに対して、日本語においては

そのような枠がないことが、短歌や俳句のような省略の文学を作り出したのでありと考えられる。そして宮下の指摘するように、この英語と全く異なる性質が日本語を母語とするものにとって、英語を習得することをむずかしくしている一番の原因になっていると予測できるだろう。このように論理をたどってくると日本語から見た場合、一番英語らしいひとつの特色は五文型によって示されていると、考えることができる。

4. 五文型は基本的には英語の持つ根本的な性質を捉えているのであるが、実際の英語の文に当たっていくと、その型に当てはまらない例が、出てきて、不十分な点が存在する。以下、実際の英語の文を分析するとき、この英語の文型をどのように拡張していったら良いのか考えてみることにする。すでにさまざまな拡張例がある。整理すると、二つの方向に修正、拡張が行われてきたと考えることができる。第一に型の種類を増やしていくことが行われている。たとえば Quirk et al.(1985:56) では S+V+As(=subject-related adverbial) と S+V+Os(=object-related adverbial) が加わっている。前者の例は My sister lives next door.であり、next door がないと文が成立しない。後者の例は、The doorman showed the guests into the drawing room.である。さらに Hornby (1956) においては25タイプの型にまで増やされている。

第二は枠の中に入る統語範疇の種類を増やすことが行われている。もともとは枠のなかに生じる要素は一般に名詞句と形容詞句であった。Quirk et al. (1985) では副詞句もまた要素になる。さらに彼らは次の文をそれぞれ以下のように分解する。

- (4) a. They like [the children to visit them]. SVO
 b. They supposed [the children] [to be guilty]. SVOC
 c. They asked [the children] [to bring some food]. SVOO

つまり不定詞もまた枠のなかに生じる要素と見做されるのである。

また佐藤 (1969) は

- (5) a. Ask him his name.
 b. Ask him how to pronounce the word.
 c. Ask him what his name is.

の三つの文を、Hornby はそれぞれ別の型に属させているが、本質的には二重目的語の構文であるとみるべきであると見做す。そうすると what his name is もまた枠を埋めている要素になるのである。また Hornby の型が増えている理由のひとつは、枠に生じる要素の種類によって異なる型にしているからである。

これらの拡張、修正とは異なり、変形生成文法からの根底的な批判がある。表面的な構造を分類していくだけでは、不十分であって、深層構造とその変形過程を考えなければならないと主張する。例えば、太田・梶田 (1974: 221-9) によれば。

- (6) a. We wanted the doctor to examine John.
 b. We compelled the doctor to examine John.
 c. We believed the doctor to have convinced John.

は「不定詞付き対格」の構文と呼ばれ同じ型に押し込まれているのであるが、さまざまな違いが見られる。例えば、補文が受身になった場合、同義関係が保てるか。

- (7) a. We wanted John to be examined by the doctor. (6a) と同義
 b. We compelled John to be examined by the doctor. (6b) と同義ではない
 c. We believed John to have been convinced by the doctor. (6c) と同義

受身変形が適用できるかどうか。

- (8) a.*The doctor was wanted to examine John,
 b. The doctor was compelled to examine John.
 c. The doctor was believed to have convinced John.

その他たくさんの違いが見られる。これらは異なった深層構造と変形の過程を仮定することによってうまく説明ができる。しかし表面構造だけ眺めていると全く同じである。

5. このような生成文法からの批判も考慮しながら、ここでは枠のなかの要素の種類の拡張を試みてみたい。副詞や不定詞などばかりではなく、小節 (small clause) も要素として枠の中に生じることができると考えてみると、うまく説明できる現象があることを以下示したい。小節はさまざまな問題を呈するのであるが、本稿では時制を持つ動詞を含まないのにも関わらず、主語・述語関

係を持つ NP XP の連鎖を言うことにする。次の例文は第五文型に属すると思われる例であり、共通点がある。つまり「目的語の位置を占める要素」+be+「補語」がすべて成り立つのである。

(9) A グループ

- a. They named the ship 'Queen Mary'.
- b. The heat turned the milk sour.

(10) Bグループ

- a. John ate the meat raw.
- b. She boiled the egg hard.

(11) Cグループ

- a. Do you think him a good player?
- b. I consider what he said unimportant.

(12) Dグループ

- a. I must get my hair cut.
- b. I can't have you doing that.

しかし細かく調べていくと、次の基準によって差が生じる。

1. 補語が省略でき、もともとは目的語のみをとる他動詞として分類されている。
2. to be を挿入できる。あるいは that 節で言い換えることができる。
3. 補語の位置にさまざまな要素がかなり自由に生じることができる。例えば、have についての例がそうである。

- (13) a. John has the water *running* in the bathtub.
 b. I have a book *being reviewed* by Dwight MacDonald.
 c. I'm having a new house *built*.
 d. The cook had the water *hot* in a jiffy.
 e. The army will have you *a soldier* in the two months.
 f. He has his eldest son *in boarding school*.
 g. Happy is when no one has the television *on*.

上にあげた3つの基準によって整理すると、以下のような分布になり、4つのことになったグループを形成するのである。+は可能、-は不可能を示す。

	A	B	C	D
1	-	+	-	-
2	-	-	+	-
3	-	-	-	+

それぞれのグループの動詞をリストにしてみる。

- A. call, drive, elect, name, paint, send, turn など。
- B. open, wash その他多数（この類の動詞の性質上リストにしにくい）。
- C. believe, consider, find, guess, hold, judge, prove, regard, report, suppose, think など。
- D. catch, feel, get, have, hear, hold, keep, lay, leave, listen to, put, see, set, smell, start, want, watch など。

意味的にこれらのタイプを調べてみる。Aグループの場合、補語は目的語が結果としてどのような状態になったかを示す。補語は結果のみを示すのである。

Bグループの場合、動詞の示す行為が行われたり、あるいは動詞の示す過程が生じる時、目的語がどのような状態であるかを、補語が表現する（10a）。あるいは動詞の示す行為が行われた時、目的語がその結果としてどのような状態になったを表現する（10b）。

Cグループの動詞は判断の意味を持つ、判断の対象になるのは命題である。それ故、一番基本的な形は that 節であり、実際頻度においても多い。それ故、否定辞 not と文副詞がたやすく生じることができる。

- (14) a. I consider Mary *not* happy with the result.
 b. I consider that building *probably* under construction.

そして補語は状態のみを示す。このことは、Zandvoort (1965:17) が believe, declare, imagine, suppose などの動詞が to 不定詞付き対格を取る時、ほとんど常に不定詞は to be, to have been の形であることを述べるが、そのことと関係するように思われる。to be も to have been もどちらも状態を示すからである。

- (15) a. Most people supposed him to be dead.
 b. I believe it to have been a mistake.

Dの動詞の場合、その意味からその対象は状況あるいは出来事になる。「所有する」「目撃する」「そのままにしておく」「保つ」などの対象は命題ではなく状況であ

る。それ故これらの動詞は that 節が取れない。さて、Stowell (1978) は小節が意味的には、状況あるいは出来事を示すのだと、there 存在文の研究において言うが、このような意味を持つことは、次の二者の観察によっても支持される。榊原 (1980) はこの種の連鎖が知覚に関する意味と結びついた時に起こることを指摘している。

- (16) a. John angry is a scary sight.
 b. It was a yellowing Polaroid photograph of T. J. on horse.

また金子 (1991: 27-30) は「…が～している写真」の表現がこの種の連鎖を伴うことを観察している。

- (17) She did not know which amazed her more, the pictures of Mrs Denham holding some lace trailing infant with all the gravity of tradition behind her, or the pictures of small children disporting themselves in classy sunhats on the beaches of southern Europe. (Margaret Drabble, *Jerusalem the Golden*)

知覚や写真と結びつくのは、命題ではなく、状況や出来事である。それ故 that 節とは同伴しないはずである。事実 that 節を伴わず、その代わりにここで言う小節を伴うのである。それ故これらの状況・出来事を対象とする動詞が目的語として小節をとっているのだと考えるのは根拠があることである。その時「補語」に対応する要素はこれらの例では状態を表しているが、後述するように結果もまた示すことが可能である。

Chomsky などは、C の動詞も小節をとると考えているのであるが、以上の観察を考慮すると、C は小節をとっていると見做さないほうが妥当のように思われる。命題を示す that 節との親近性が強い。consider が単一の構成素をとるのかどうかの議論は、奥野 (1989: 163-9) に見られる。

さて小節を取る動詞をいくつか観察してみよう。

- (18) a. The policeman caught [the thief].
 b. We caught [him trying to sneak out of the room].
 (19) a. He made [a poem].
 b. The hot weather makes [some people sleepy].
 (20) a. You will get [your share of money].
 b. He got [his shoes and socks wet].
 (21) a. This house has [an excellent garden].

- b. He had [all his enemies imprisoned].
 (22) a. Will you keep [my belongings]?
 b. She kept [them speaking].

(18)-(22)において、目的語の位置に (a) では名詞句が (b) では小節が生じている。(18a) では catch は「捕まえる」の意味を持ち、(18b) では「目撃する」の意味を持つ。どうしてこういう意味の差が出てくるのか。前者では、目的語は人あるいは物を示し、後者では、状況を示す。人あるいは物を捕まえるか、状況を捕まえるかの違いであって、どちらにおいても、catch はもともとは同一の意味を持っていると考えることができる。対象の差によって、一見意味が違うように見えるだけである。

make, get, have, keep などの場合も、そういう状況を「つくる」、「得る」、「持つ」、「保つ」と考えれば、「物」が目的語の時と全くパラレルに考えることができる。例えば、物を「つくる」か、状況を「つくる」かの違いにすぎない。(詳しくは、小川 (1991), (1992) を参照して下さい。)

以上は目的語の位置に小節が生じるという主張でありこの場かぎりのように見えるが、実はもっと普遍的なものである。この位置だけに小節に限られるのではなく、主語や前置詞句内など名詞句が一般的に起こる場所にも小節は生じるのである。(詳しくは Ogawa (1994a) を参照して下さい。)

- (23) a. [Everybody yelling about taxes] is an interesting development.
 b. [Workers angry about the pay] is a situation to avoid.
 c. We stayed in bed with [the fire roaring...]
 d. With [Emil afraid of snakes], you shouldn't take him along.

さらに there 存在文においても小節が名詞句と並んで生じると考えるとうまく説明できる現象がある。(詳しくは小川 (1991) を参照して下さい。)

- (24) a. There are [two schools] in the town.
 b. There must be [some mistakes].
 (25) a. There was [a man sick].
 b. There were [several dogs barking].

(24)は物の存在を(25)は状況の存在を示している。つまり「ある人が病気であるという状況があった。」という意味を (25a) は持っている。

以上、五文型の枠の中に that 節や不定詞ばかりではなく小節も生じると仮定した場合、うまく説明できる言語事実があることを示した。

6. 次に英語において一見枠を守っていない例について考察してみる。最初に結論めいたことを言えば、英語がこれほど基本的に枠を守る言語であることを考慮すると、一見当てはまらないと思われる例もまたその枠を厳密に守っていると考えても間違いないのではないか。ここでは吉本隆明が三木成夫著「海・呼吸・古代形象」(1994年うぶすな書院)の解説において「初期論的な方法」と名付けた方法を想起してみたい。彼によるとその方法とは「初期という枠組みを仮定して、その内部の構造と、展開の方向と、反復の仕方の組合せとして、事象が膨らんでいく過程を位置づけることだ。」ここではそれを私流に解釈してみたい。初期というのは、ここでは動詞によって枠が決定されるということである。これに結びつけて以下考えてみたいと思う。

自動詞にもかかわらず目的語を取っているように見える例がある。つぎのような結果を示す表現である。

- (26) a. John ate himself sick.
 b. You will drink yourself out of your job.
 c. He walked himself lame.
 (27) a. Mary cried her eyes red.
 b. I walked my shoes to shreds.
 c. He talked his father into buying a new car.
 d. Mary sang the baby to sleep.

これらの構文をとる動詞はほかに bow, fly, laugh, look, preach, roar, run, scream, shout, sleep, smile, stare, think, tick, worry などがある。はたして動詞の直後にある要素は目的語なのであろうか。もし目的語と考えれば、これらの例は五文型から外れていることになる。自動詞であれば目的語の枠がないはずであるからである。しかし本当にそうであろうか。これらの現象を説明するために結果を示す表現全体を視野に収める必要がある。その枠はどうなっているのか、調べてみよう。SVCにおいてCは状態と結果を示す場合がある。次は状態を示す例である。

- (28) a. The girl was very restless.
 b. They kept silent.
 c. That sound a reasonable idea.
 d. We lay flat.

e. They remained good friends.

Cは一般に形容詞句か名詞句であるが、次の前置詞句もまた状態を示すと考えて良いであろう。状態を示す前置詞句は一般に in によって導入される。

- (29) He burned the letter, and when we arrived it was lying in ashes.

次は結果を示す例である。まず動詞が純粋な変化の意味を持つ場合。

- (30) a. They became older.
 b. It got dark.

次に変化ばかりでなくそのやり方も含んでいる動詞の場合。

- (31) a. The door opened wide.
 b. The butter melted soft.
 c. It froze solid.

become の後では名詞句はそのまま生じるが、get, break, melt の類では into, to に導入される前置詞句となる。

- (32) a. He got into a rage.
 b. The windshield broke into pieces.
 c. The butter melted to a liquid.

SVOCにおいても同様にCは状態(33)か結果(34)を示すことができる。

- (33) a. I ate the meat cold.
 b. I imagined him dead.
 (34) a. Locusts ate the country bare.
 b. He opened the window wide.
 c. She cut the bread into slices.

整理すると、Cの位置に生じる要素は状態や結果を示すことができると言える。図式化すると、

- (35) V [state or result]
 V [] [state or result]

このようにCの位置には結果を示す要素がくるのであるが、この位置に句ばかりでなく、小節もまた起こり得る要素と考えることができまいだろうか。すでに述べたように、他のさまざまな位置で小節は生じることができ、この位置の特殊性では決してないのである。Hoekstra (1988), Sato (1987), Yamada (1987) もまた小節が生じていると見做す。この仮定が成立すれば、きわめて簡単に(29)-(27)の例が説明できる。例えば(26a)は彼が食べた結果、「自分が病気になる。」という状況が生まれたという意味が表現されていることになり事実と合う。

他の例文についても同様である。(26)のような全く「変化」の意味を含まない動詞の場合、言い換えれば「行為」の意味を持つ動詞の場合に、主語がどんな状態になったかを示すのに、結果の位置に句ではなく、小節が生じるのである。(26)と(27)の比較から明らかなように、句の形であろうが小節の形であろうが、意味的にはどちらも主語がどのようになったのかを示す。動詞のもつ意味の種類によってどちらの形をとるかは自動的に決まるのである。ちょうど(26)が示すように、名詞句になるか前置詞句になるかが動詞によって決まったようにである。(27)の例は主語そのものの状態ではなくて、主語や動詞の示す行為ときわめて密接に関係するものが、どんな状態になったかを示すという点で(26)とやや異なる。主語の状態を示す(26)を基本と考えれば、(27)はそこから派生されたものと見做すことができる。

この種の例について逆の方向の提案がある。本稿では自動詞であるから目的語の枠はないので、SVCのCのところにも小節が生じていると見做した。それほど英語の動詞の持つ枠は厳しいと考えた。ところが中村(1993)は、They laughed him out of the room. のような文について、「AがBのことを嘖うとBが部屋から出ていった」という状況は、Aの嘖いがBに影響し、その結果Bが部屋から出て行ったの認識されるので、その認識 John kicked the ball off the field. のような言語形式が持つ認知構造と合致し、結果構文で表現されると考える。言い換えれば、結果述詞が付加されることによって、主語から対象への影響が認知的に際立ち、「主語-動詞-目的語-結果述詞」という構文に適した認知構造が成立すると考える。本稿のように小節と分析するのは誤りで、このような結果構文における主語から目的語への力の流れと、通常のSVO構文の主語から目的語への力の流れは、認知上同じ性質のものであり、いずれの場合も、主語の力は認知的には目的語に達していると思ふ。つまり認知上同じ性質を持つので、本来の自動詞を他動詞の枠に変えようとするのだと云ってよいだろう。また He danced himself tired. のような文がどうして可能かということについても触れている。この種の構文のベースとなる make の使役構文 He made himself tired. と、使役性を有する He danced. とが融合することができるからであろうと考えている。

荘口(1992)もまた「主語-動詞-目的語-述語」と分析する。この種の構文では、自動詞自体に使役の意味

は含まれていないが、それがS-V-NP-XPという構文で現れることにより、動詞の行為がその後の名詞句を次の述語の表わす状態にした、という使役の意味を持つようになったと考える。(また影山(1994)は語彙概念構造の操作によって、同じような構文を説明しようとする)。

中村・荘口対本稿の提案のどちらが正しい分析なのかすぐには、判断できないが、結果を示すのに「目的語+補語」の枠で示すのか、「補語」の枠だけで示すのかという問題に帰着すると思われる。中村のように認知構造を重視すれば自動詞が目的語+補語の枠をとることに拡張されたことになり、本稿のように自動詞の枠を重視すれば補語の枠に小節をはめこんで結果を示すことになる。

7. 第二にいわゆる同族目的語の構文がある。ここでもまた自動詞の後に一見目的語のように見える要素が存在する。

- (26) a. He laughed his unpleasant laugh again.
 b. After that I slept the sleep of the just.
 c. Soams smiled a sneering smile.

これと類似のものに「動詞と類似意味、あるいはきわめて密接な意味関係をもつ名詞」が自動詞の後に続くものがある。

- (27) a. He sighed his relief.
 b. The bells were ringing a merry peal.
 c. She smiled a welcome.

この二つのグループの違いは、前者においては動詞と同形の名詞がその後に続いているが、後者では意味的に密接な名詞が続いているということである。しかしどちらも動詞に続くものが、結果を示している点で同じである。従来これを副詞ないしは結果の目的語と見做してきた。しかしこれらの動詞は自動詞であり次に続く要素が結果を示すという点に注目してみたい。SVCの結果を示すCの位置にこれらの表現が生じていると考えたらどうであろうか。普通、Cは主語がどんな状態になったのかを示しているのだが、主語がある行為をしたらその結果生じたこともまた示せるように拡張されたと考えられないだろうか。たしかに主語の行為の結果生じたことを表現する点では他動詞の結果の目的語と似ているが、これは考えられないことではないだろう。なぜなら(26)では主語がどんな結果になったかをCが示しているが、そればかりではなく、(27)からわかるように主語以外のものが

どんな結果になったかも示すいわば拡張された手段も英語は持っているのであるから、そのうえ(27)の動詞と同族目的語をとる動詞はかなり重なるのである。

さらに目的語とする具合の悪い現象が存在するのである。例えば受動変形は適用されないし、同族目的語全体をwhatによって疑問化することはできない。

- (38) a. *A natural death was died by your father.
b. *What did Miss Marple smile ?

一方同族目的語が補語の位置を占めているとすれば、当然受動変形は適用されないし、whatで疑問化されず、howで疑問化されるはずである。事実その通りである。

- (39) How did Miss Marple smile ? —She smiled a deprecating smile.

この構文についても中村は laugh a merry laugh の a merry laugh は make a merry laugh と同様目的語と見做す。やはりここでも認知構造を重視するか、自動詞の持つ枠を重視するかの問題に帰着する。同族目的語が結果を示す補語の位置に生じているのではないかという説については小川 (1994c) を参照してください。

8. 第三に Jackendoff (1992) が問題にした次のような構文がある。

- (40) a. Bill belched his way out of the restaurant.
b. Harry moaned his way down the road.
c. Sam joked his way into the meeting.

自動詞の後に one's way + 前置詞句が続く構文である。ここでもやはり(29-32)と同様、自動詞+結果の補語の補語の部分に結果を示す小節が生じていると考えたい。このように仮定するとさまざまな現象がうまく説明できるのである。それについては紙幅の関係で省く。細かい議論は小川 (1994b) に譲る。

9. いままで自動詞について考察してきたが、以下では他動詞の例を検討してみたい。まず wash について調べてみる。wash は目的語に「洗う対象」がくる。さらにその後に結果示す要素を取って第五文型でも用いられる。

- (41) a. Mary washed the clothes.
b. Wash them clean.

しかしながら次のような文例が存在する。

- (42) a. She washed the stain out of the clothes.
b. Can you wash the spot out ?

- c. She washed the mud off her dress.

目的語に対象ではなくて「洗い落とされる物」がきている。この時 out (of 以下) がないと文は成り立たないであろう。あるいは (42b) の the spot のように洗う対象に解釈しなおされてしまうだろう。以下は同様の例である。岩沢 (1988), Hoekstra (1988), Levin and Rapoport (1988) などによる。

- (43) a. He rubbed the tiredness out of his eyes.
b. They wrung a confession out of him.
c. And the look of the mare shames silliness out of me.
d. The surgeon designed to frighten a little money out of him.
e. She was beating the dust out of the carpet.
f. He shook the snow off his clothes.
g. Shook nuts from the tree.
h. The company processes the vitamins out/in.
i. She squeezed the toothpaste out.

図式化すると

- (44) a. V NP₁
b. V NP₂ { P NP₁ }
c. *V NP₂ { Particle }

ということになる。具体例を挙げると、

- (45) a. He rubbed his eyes.
b. He rubbed the tiredness from his eyes.
c. *He rubbed the tiredness.
(46) a. The company processed oranges.
b. The company processed the vitamins out (of oranges).
c. *The company processed the vitamins.

((b) と異なり、オレンジではなくビタミンが処理する対象になる。)

結果の目的語の中には、単独で生じることができるものがある。build a house, paint a flower (cf. paint a door), dig a hole (cf. dig the ground), light a fire (cf. light the lamp) などである。しかし単独で目的語が生じることができないものがある。

- (47) a. The water had washed a channel in the sand.
b. The storm washed gulleys in the

mountain.

- c. The acid ate holes in the cloth.
d. An ash burned a hole in the dress.

ここでも(44)の図式が成立する。例えば、

- (48) a. An ash burned the dress.
b. An ash burned a hole in the dress.
c.* An ash burned a hole

同じことが次のような不変化詞を含む文についても言える。もっともこれは自動詞である。

- (49) a. shrug the criticism off.
b.* shrug the criticism.
(50) a. drink one's troubles away.
b.* drink one's troubles.
(51) a. rub the word out.
b.* rub the word.

これらは、次のような不変化詞があってもなくても成立する類とは対照的である。ここでは動詞は他動詞である。

- (52) a. throw your lunch up.
b. throw your lunch.
(53) a. eat an apple up.
b. eat an apple.

この三つの現象はどのように説明されるのであろうか。一つの提案をしてみたい。今まで見てきたように、動詞には枠がある。そうすると英語では、なんらかの仕方でのこの枠に押し込めようとする力が働くであろう。結果を示す要素には、小節もなり得ると考えることができるならば、次の説明が可能である。

- (54) a. He washed the soap out of his eyes.
b. An ash burned a hole in the dress.
c. drink one's troubles away.
はそれぞれ「目を洗ったら、その結果目から石けんがとれた。」「灰が洋服を焦がした、その結果洋服に穴が生じた」「飲んだら、その結果苦勞が吹き飛んだ」という意味である。文字どおり表現すれば、次のようになる。
(55) a. He washed [his eyes] [the soap out of his eyes].
b. An ash burned [the dress] [a hole in the dress].
c. drink [] [one's troubles away].

目的語の位置に his eyes, the dress が生起して、補語の位置に結果を示す小節が生起している。(55c) の drink は目的語がない。あるとすればアルコール類で

あって他の飲み物ではない。しかし (55a-b) は英語の枠から見ると、不可能である。なぜなら英語では(49-51)、(49)の例が示すように、小節が結果を示すことができるのは、自動詞の後のみであるからである。そこで washed の後の his eyes が消えざるを得ないのである。たとえ消えても文脈から復元できる。文の最後にある前置詞句の中の名詞句と同一であるからである。あるいはもともと (55c) のように、自動詞として使われていたり、目的語が存在していても自動的に復元できるものである (cf. 岩沢 (1988))。

以上動詞の枠を一見逸脱する例を自動詞と他動詞から挙げ、実際は枠を守っていることを論証しようと、試みた。

10. 本稿では英語において動詞のとり文型について二つの点から検討をした。

- i. 枠の中に入る要素として、小節を加えようとまく説明ができる現象があること。
- ii. 枠を逸脱しているように見える例が若干存在するが、実は枠を厳密に守っていること。

参考文献

- Hoekstra, Teun. 1988. Small clause results. *Lingua* 74. 101-39.
Hornby, A. S. 1956. *A guide to patterns and usage in English*. Tokyo: Kenkyusha.
細江逸記. 1979. 改定新版 精鋭英文法汎論. 東京: 篠崎書林.
岩沢玲子. 1988. 間接的「結果 nexus」の一考察—移動の視点から. 創価大学大学院紀要10. 105-22.
Jackendoff, Ray. 1992. Babe Ruth homered his way into the hearts of America. *Syntax and semantics* 26, ed. by Tim Stowell and Eric Wehrli, 155-78.
影山太郎. 1994. 語彙概念構造と結果表現. 英語青年 7月号. 188-90, 204.
金子 稔. 1991. 現代英語・語法ノート. 東京: 教育出版.
小泉保他編. 1989. 日本語基本動詞用法辞典. 東京: 大修館書店.
久野 暲. 1973. 日本文法研究. 東京: 大修館書店.
Levin, B. 1993. *English verb classes and*

- alternations: A preliminary investigation. Chicago, IL: University of Chicago Press.
- Levin, B. and Rapoport, T. 1988. Lexical subordination. *CLS* 24. 275-89.
- Levin, A. 1987. The pseudo-appositive adjective. *General linguistics* 17. 129-40.
- 宮下眞二. 1985. 英語はどういう言語か. 東京: 季節社.
- 中村芳久. 1993. 構文の認知構造ネットワーク——全般的な言語理論をもとめて——福岡言語学研究会編「言語学からの眺望」, 247-68. 福岡: 九州大学出版会.
- 小川 明. 1991. There 存在文についての一考察. 千葉修司他編集「現代英語学の諸相」(宇賀治正朋博士還暦記念論文集), 377-86. 東京: 開拓社.
- . 1992. Small Clause をとる動詞. 東京家政大学研究紀要 32. 143-52.
- Ogawa, Akia. 1994a. *As*-phrases as small clauses. *Synchronic and diachronic approaches to languages: A festschrift for Toshio Nakao on the occasion of his sixtieth birthday*, ed. by Shuji Chiba et al., 439-57. 東京: リーベル出版.
- 小川 明. 1994b. 結果を示す表現——John ate himself sick. から She wept silent tears. まで. 東京家政大学研究紀要 34. 151-62.
- . 1994c. 同族目的語に関する試論. *Otsuka review* 30. 207-17.
- 奥野忠徳. 1989. 変形文法による英語の分析. 現代の英語学シリーズ9. 東京: 開拓社.
- 大室剛志. 1990-1. 同族‘目的語’構文の特異性. 英語教育 11月号. 74-7. 12月号. 78-80. 1月号. 68-72.
- 太田 朗・梶田 優. 1974. 文法論Ⅱ. 英語学体系 4. 東京: 大修館書店.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. 1985. *A comprehensive grammar of the English language*. London: Longman.
- 榊原弘章. 1980. 知覚意味と補文選択. 英語学 22. 89-100.
- Sato, Hiroaki. 1987. Resultative attributes and GB principles. *English linguistics* 4. 91-106.
- 佐藤暢雄. 1969. VERB PATTERNS の一試案. 英語学 1. 118-129.
- 荘口美樹子. 1992. 結果を表す構文に関する一考察. 九大英文学 12. 155-71.
- Stowell, T. 1978. What was there before there was there. *CLS* 14. 458-71.
- Yamada, Yoshihiro. 1987. Two types of resultative construction. *English linguistics* 4. 73-90.
- Zandvoort, R. W. 1975. *A handbook of English grammar*. 東京: 丸善.